

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院学生研究

2021年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 観光学研究科 観光学専攻		
研究代表者 (2022年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年		辛 承憲
指導教員	所属部局・職名		氏名
	観光学部・教授		小野 良平
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名
研究課題	草梁倭館の移転過程に関する歴史地理学的考察—日本側の立場を中心に		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2022年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	観光学研究科観光学専攻 博士課程後期課程2年次		辛 承憲
研究期間	2021 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、李氏朝鮮時代の日本人町であった「草梁倭館」を事例に、その空間を提供する朝鮮側ではなく、定住する日本側を中心とし、新倭館として草梁倭館が選定された理由について明らかにすることを目的とした。この際、文献に表れない自然環境の特性について着目し、倭館の移転過程とその要因となった問題を多角的に検討した。その上で、港町としての近世の草梁倭館と酒田の空間構造を比較し、草梁倭館の空間構造に含まれる日本側の理想を考察することを試みた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 都市史 } { 空間構造 } { 草梁倭館 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、倭館の自然環境特性と移転を求めた日本側の立場に注目し、草梁倭館が移転先として選ばれた要因を明らかにし、草梁倭館の空間構造と同時期の日本の港町(酒田)との比較研究を通じ、草梁倭館の空間構造に含まれていた日本人側の思想を検討することを目的とした。

ここでは、既往研究の問題点で指摘した史料分析だけではなく、文献に表れない自然環境条件に着目し、倭館に適した環境を分析した。次に、自然環境条件をもとに、旧倭館から新倭館への移転先であった候補地を比較し、定住した日本側の立場から考察した。最後に、草梁倭館の景観復元を試み、自然環境(主に地形)・空間構造(都市の軸および町割りの類似性)が類似する山形県酒田を例に挙げて比較研究を通じ、その特徴を明らかにすることを目指した。

1. 倭館の自然環境的な特性

倭館の変遷史を遡ると、李氏朝鮮時代の倭館は所在地が幾度も変更されているものの、文禄・慶長の役を軸として前後の時代に特徴的な相違点が見られた。文禄・慶長の役以前の倭館は、小規模な戦争による朝鮮側の判断から、3浦(富山浦・齋浦・鹽浦)倭館が開放・閉鎖を繰り返した。一方で、文禄・慶長の役の以後の倭館は、日本側の不具合を主な理由とし、絶影島→豆毛浦→草梁の順に居住地の質が良くなる形で変遷した。本研究では、日本人側の立場を検討するため、絶影島倭館・豆毛浦倭館・草梁倭館に関する史料(倭館移建謄録、館守日記、朝鮮王朝実録、多数の古地図など)から、対象地域の自然環境特徴に関する情報を抽出した。その結果、①倭館は、外交・貿易が主な目的であった施設であり、対馬から渡航した船が接岸できる停泊施設、常時・臨時滞在者の宿泊施設が必須となる都市形態であった。②文禄・慶長の役以降であるため、朝鮮側の強い警戒心が、都市形態にも表れ、周辺環境より低地かつ石垣囲まれた形態であった。③このような地形は、防備とも関係深いと考えられ、GISを用いて朝鮮側の中心城と各倭館の可視性を分析した。その結果、3か所の事例すべてにおいて、朝鮮側からは日本側を望めたものの、日本側から朝鮮側は眺望することができない環境であったことを明らかにした。

2. 倭館移転問題における定住者として日本側の立場からの要因と結果

文禄・慶長の役の以後の倭館移転問題は、日本側の不具合、不便さが理由として挙げられる点に着目し、各倭館の移転過程から、日本側が要求した倭館の必須条件を分析した。

絶影島倭館から豆毛浦への移転

絶影島倭館は朝鮮側の承認を受けておらず、日本側が内密に設けた仮倭館として存在していた。絶影島倭館を日本側が選定した理由を考察してみると、①対馬から絶影島は最短ルートであり、文禄・慶長の役の際にも主要な航路であった点、②絶影島倭館の地形は、背後には山が立地し、船を停泊することが可能であり、典型的な港町の地形であった点が挙げられる。その一方、朝鮮側が絶影島倭館を正式に承認した後の1606年「宣祖実録」の記事によれば、絶影島倭館での接待が非常に悲観的な意味合いで捉えられており、外交の業務には適してない建物であったことが分かる。その後、新倭館への移転交渉が行われ、日本側は釜山鎮營(元は釜山浦倭館)を求めたものの、朝鮮側は軍事的な理由として豆毛浦倭館を移転先として決定した。以上から、日本側が求めた倭館の条件としては、①安全な航路である点、②安全に停泊ができる地形、③軍事的要地(軍事的諜報活動のため)である点が挙げられる。

豆毛浦倭館から草梁倭館への移転

1607年に設けられた豆毛浦倭館は、1678年に草梁倭館へ移転するまで72年間存続した。しかし、豆毛浦倭館は敷地面積が狭い点、火災が発生すると延焼が避けられない点、港湾が狭い点などの様々な問題があり、日本側は朝鮮側に1640年から1672年まで合計8回

研究成果の概要 (つづき)

にわたり倭館の移転を要求した。研究代表者は、交渉を日本側から分析し、その原因を整理すると以下である。①倭館施設の不便：倭館の敷地面積の狭さ、船の出入りが不便、水柵の古さ、倭館の古さ、②軍事的な理由：倭館の北側の内部が外部から視界に入る点、北側の高山のため防備ができない点、③自然環境的な要因：水深が浅い、入江が狭い、地盤が周辺より低い、南風が強い、海の可視性の確保などがあった。以上の倭館移転変遷史における交渉過程を分析する中で、日本側が倭館という施設に要求した項目について考察した。

以上の要因をもとに、日本側はなぜ新倭館地として多大浦ではなく草梁を選定したのか、都市(港町)の機能的側面から比較分析を行った。その結果は以下である。

①船溜：自然環境的な要因と関係の深い施設である船溜まりは、港町において最も重要な施設であると考えられる。理想的な船溜まりの条件は、水深が深く、入江が広く、風からの影響を最小限とする場所であり、草梁は全ての項目において優れた条件であることを確認した。特に、草梁は前方に風よけの役割を果たした島(絶影島)が立地し、船の停泊に適した環境であった。

②倭館(館宇)：施設の課題と軍事的理由と関係深い倭館は、敷地面積の広さと周辺の自然環境が重要な要因であると考えられる。第一に、広さに関しては、現在の地形図上に比較すると、草梁は広さが約 31000 m²(約 94000 坪)であったことと比較し、多大浦は約 40000 m²(約 12000 坪)であった。また、多大浦は背後の 500m の距離に標高 250m の山(現在のアミ山)が立地しており、山に囲まれた地形であるものの、草梁は背後の 1km の距離に標高 160m の山が立地している。また、草梁の中心軸に山(現在の龍頭山)が立地し、防備的な側面からも良い環境であった。

③海の可視頻度：館守が記録した毎日記を参照すると、日課の一つとして天気観測業務があり、天気観測が重要な任務の一つであることが推測できる。そのため、草梁と多大浦において、最も優れた視点場を決め、可視性分析を行い、草梁の方が多大浦より圧倒的に広い可視性を確保したことを確認した。

以上の分析から、定住した日本側の立場から、倭館の条件を考察し、新倭館の候補地である草梁と多大浦を比較し、なぜ草梁倭館が選定されたのかに関する知見を得られた。

3.近世港町としての釜山と酒田の空間構造比較

近世における港町は、港の機能的側面と経済活動による港のエリアの拡張とそれに適合する町割りが行われ、計画都市の礎になった時期として、極めて重要な時期である。その一例として、研究代表者は釜山(草梁倭館の跡地)と酒田の空間構造が類似していることに焦点を当て、研究を進めてきた。また、近世時代に盛んであった草梁倭館と酒田の景観を復元し、その類似性を考察し、草梁倭館の空間に移された日本側の空間的思想を都市史の側面から明らかにすることを目指した。

その一環として、研究代表者は、2022年2月9日～11日にかけて、山形県酒田市に滞在して現地調査を実施した。その結果、①町の形が道を軸に形成されており、明確にゾーニングができている点、②町を形成するいくつかの軸は、周辺環境と港の経済的な部分と関連している点を確認することができた。また、近世の草梁倭館における史料から、酒田の都市構成と類似していることを確認し、その関係性に関する着想を得た。

以上のように、現在(2022年3月末)における本研究の成果としては、文献に現れない倭館の自然環境的な特性および都市としての側面を明らかにし、定住者であった日本側の立場から、倭館へ求めた要因を多角的に捉え、新倭館として草梁倭館が選定された理由を明らかにすることができた。しかし、草梁倭館の空間構造を究明することに関しては、未だ課題が残されており、今後の釜山における現地調査を通じ、両方の比較が必要である。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)
- ④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

今年度は、新型コロナウイルスによる移動制限の影響を受け、研究対象地において現地調査を実施することが不可能であった。そのため、本研究の成果は次年度の歴史地理学会において成果を投稿する予定である。